

その子にあつた関わり方をする

不登校・引きこもりの子どもと接して

彩の国子ども・若者支援ネットワーク 白松 大史

勉強に限らない支援を行う

アスポート学習支援事業(以下、アスポート)が二〇一〇年九月に始まって、今年の九月で十年目になりました。もとは生活保護世帯の高校進学をサポートする目的で、約二百人の中学三年生を集めて始まった事業でしたが、現在は、生活保護世帯だけではなく就学援助世帯やひとり親世帯などへ支援は拡大し、小学生から高校生までを支援対象としています。いま、アスポートを利用している子どもたちは、およそ千五百人います。その子どもたちを、約千人の大人が支えています。家庭訪問は、年間七千回以上実施しています。

子どもたちや世帯それぞれがアスポートに期待することは多様です。

成績アップのために、個別指導塾など学

習塾や家庭教師のように学習教室を利用する世帯や子どももいます。勉強はするけれど、それよりもおしゃべりや遊びなど楽しい時間を過ごすために、毎週学習教室を楽しみにして参加している子どももいます。学習教室では、マンツーマンにより子どもの様子に合わせた学習指導を行ったり、イベントなどを開催して大人や他の子どもたちとの交流を促すよう工夫したりするなど、子どもたちが安心して参加できるように空間をつくっています。不登校状態の子どもであっても、アスポートの学習教室に来ることができるとは少なくありません。

もちろん、学習教室に来ることが難しい子どもたちもいます。アスポートを利用する子どもたちの中には、不登校や引きこもり、対人恐怖などの困難をかかえている子どもたちも少なくありません。保護者も、

経済的・精神的・時間的・体力的に余裕がなく、思うように子どもに関われないなど、様々な困難を抱えて子育てや日々の暮らしに向き合っています。こうした状況に対応するためには、学習教室を開いて勉強を教えるだけでは不十分です。

アスポートは開始当初から、学習教室で勉強を教えるだけにとどまらず、訪問支援も大切にしてきました。教室に来ることのできない子どもたちへ学習教室に準じた学習指導を行うほか、対人コミュニケーションを促すために相談相手として話を聞いたり、外出に慣れるために一緒に買い物に行ったりするなど、学習教室だけではできないような支援も行っています。また、家庭環境を把握しつつ保護者の悩みを聞いた、適切な支援機関等につなげたり、あるいは学校の三者面談や高校説明会への同行、書類作成のお手伝いなどもしています。



子ども・世帯の「周波数」に合わせて関わる

アスポートが関わる子どもの六人に一人は不登校状態にあります。教室に来られる子どもがいる一方で、引きこもりがちで、なかなか自宅から外に出られない子どもたちもいます。一言で「不登校」「引きこもり」といっても、子どもによって状況は様々

です。そうした子どもたちとどのように関わっているのか、いくつかの事例で紹介したいと思います。

【事例一 指導的にならないで関わる】

ある地区に暮らすA君（中三）、B君（中一）、Cさん（小四）の三人のきょうだいは、三人が幼い頃に両親が離婚しました。その後母親と死別して、現在は母方の伯母に育てられています。

アスポートが関わり始めたのは約三年前です。当初この世帯に関わる相談員から、A君の基礎学力の向上のために家庭訪問による学習支援の要請があり、伯母の同意を経て支援を始めました。

世帯に関わるなかで、伯母の養育が十分でなく、子どもたちが一日に一食以下しか食事を摂れずにお腹を空かせる様子を目の当たりにしました。学用品の用意や修学旅行の積立などもできていませんでした。子どもたちは低学力で、学校生活にうまくなじめず、学校をよく休んでいました。自宅には物やゴミが散乱し、室内で飼っている犬の糞尿で畳は汚れ、土足でしか生活できないような状況でした。そんな衛生環境の悪いなか、子どもたちは畳に座ったり寝そべったりしながら、ゲームや動画サイトを

見るなどして一日を過ごしていました。

この世帯への支援においてアスポートとして取り組んだことは、部屋の片付けでも生活指導でもなく、まずよく話を聞くことでした。既にこの世帯には様々な支援機関が介入していましたが、訪問の中で、大人たちがそうした機関から「指導」されることに嫌気がさしていた様子が見えてきました。まずよく世帯の話を聞いて信頼関係を築きつつ、世帯や子どもたちができることに少しずつ取り組んでもらうよう方向付けていくこと、それがこの世帯と子どもたちに必要なことと思われました。

はじめのうちは、A君が苦手とする九九や漢字の書き取り練習のためにプリントを持参しても一向に手をつけず、ゲームに熱中しているだけでした。こちらからの問いかけに返答しなかったり、機嫌が悪いとすぐ乱暴な口調になったりして、コミュニケーションを取るのがやっとでした。伯母も、当方の支援をやや冷ややかに傍観しているように見受けられました。ただ、こうした関わりがどこかで芽を出すだろうと信じ、粘り強く子どもたちや伯母と関わっていきました。

あるとき、伯母から一本の電話がありました。それは相談の電話で、曰く、実は自

宅の冷凍庫に子犬の死骸があつて、それをどうしたらいいのか分からないとのこと。他のところに相談したらただ怒られてしまうだけだが、アスポートの人なら大丈夫かなと思つて連絡してくれたとのことでした。自宅の庭には死骸を埋める場所が見当たらなかつたため、私たちが手伝ひ、清掃工場に持ち込んで処理してもらふことにしました。この頃から、伯母も私たちに心を開いて相談してくれるようになっていきました。

また別の日、家庭訪問したときのことです。A君が「俺、自分の部屋を持ちたい。部屋を綺麗にして、ちゃんとした生活がしたい。」と私たちに話してくれました。話を聞いてみると、それまで自分の生活環境を何とも思つていなかったが、学校で友達と話をするうちに生活環境に違和感を持つようになったのだといひます。ただ、誰に相談すればいいのか分からなかつたので、とりあえず思い切つてアスポートに話してみようと思つた、と話してくれました。その後A君は、伯母やB君・Cさんと話し合ひ、犬の糞尿で汚れた居間をきれいに掃除して、そこが世帯全体の新たな憩いの場所となりました。そしてこの居間は結果的にA君が落ち着いて学習できる場所となり、

A君はそれまで避けていた受験勉強に取り組みようになっていきました。

【事例二】いろいろなアプローチを模索する

ある地区に暮らすD君（高二）は、自分の気持ちを言葉にするのが不得手だったり、感情のコントロールがうまくできなかったりして、対人コミュニケーションが得意ではありません。中学時代は同級生との間でトラブルが生じたり、学校の集団生活に馴染めなかつたりして、不登校になりました。

中学二年生からアスポートを利用することとなつたのですが、当初は、同じ中学校の制服や体操着を見ること自体を嫌がったり、学習面での遅れを他人に知られることを恥ずかしいと気にしたりして、なかなか学習教室に来ることができませんでした。家庭訪問をして一緒に勉強することを提案しましたが、本人も消極的で、保護者も忙しく難しい状況でした。当方としては、早急な働きかけをするよりは、定期的に電話をかけ、本人の様子や保護者の困り感を聞いていき、困つた時に頼ってもらえるよう少しずつ関係を作っていくことにしました。

D君が中学三年生になつた頃、保護者から訪問学習をしてほしいとの連絡があつて、週一回程度訪問学習を行うことになりました。はじめのうち、D君は学習を嫌がつて自室に籠ることが多かつたため、無理に学習を進めることはしませんでした。本人の趣味であるプラモデルのことや、本人が興味を持つていたプログラミングや経済、会計に関することなど、受験勉強とは直接関係のないことを一緒に話したり調べたり取り組んだりしながら、まずD君とのコミュニケーションを図ることに重点を置きました。

そのような関わりが二、三ヶ月続いたあと、D君は少しずつ学習に取り組むようになっていきました。こちらが持参したプリントに取り組むほか、自らも教材を購入してもらつて解くようになりました。分からないことも少しずつ質問してくれるようになりました。また、受験が近づくと、面接練習のために、行くのを嫌がつていた学習教室にも来るようになりました。

無事に高校受験を乗り切つたD君は、高校生になつてからも引き続き学習教室に参加しています。勉強だけではなく、日々の他愛のない出来事や愚痴を話に来てくれます。人とのコミュニケーションも少



しずつ慣れてきています。

じっと待つ

経済的に苦しい状況にある世帯は、その苦しさのため、生存権や学習権など様々な権利をはく奪されてきました。アスポートはこれまで、貧困により奪われた権利を回復するサポートのため、拠り所としての学習教室の開催や、家庭訪問など、様々な形

での支援に取り組んできました。現在は、対象世帯も対象学年も当初から拡大しています。高校進学を保障することにとどまらず、社会からの期待に応えるべく様々な子どもたち・世帯からの多様なニーズに応えることが求められています。私自身、アスポートに携わって五年目になります。九州の離島出身の私が、高校から親許を離れて生活していたとはいえ、埼玉の地で学習支援事業に関わるようになるとは夢にも思いませんでした。子どもの頃から、何かしらの形で人の役に立ちたいという思いはありましたが、その思いだけでは全く足りないことも日々の実践の中で痛感してきました。コミュニケーションの仕方や支援制度の理解、学習指導の方法など、多様なニーズに応えるべく自らの専門性に閉じないで日々勉強していかなければならないからです。

こうしたなか、不登校や引きこもりがちの子どもたちを含めて、アスポートが取り組んでいることは、子どもが安心して学んだり人と関わったりすることを保障し、その子どもの可能性を引き出し、子どもたちがちよつとでも前を向いて自らの人生を歩めるように後押しをすることだと言えます。その際、「不登校」「引きこもり」など

という枠にあてはめて杓子定規に対応するというよりは、子ども一人ひとりとコミュニケーションを図り、その子を取り巻く環境やその子の個性を把握し、その子に合った働きかけを、その子の間合いで行うことを大切にしてきました。このやり方はすぐに成果は出ないかもしれませんが。しかし地下水脈のように、支援の効果がどこかで現れてくると信じて取り組んでいます。

